

令和 3 年 5 月 31 日現在

機関番号：37503

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17H02255

研究課題名(和文)日本の世界農業遺産(GIAHS)地域の観光を通じた農村振興に関する比較研究

研究課題名(英文)A Comparative Study on Rural Development through Tourism in the Areas of Globally Important Agricultural Heritage System (GIAHS) in Japan

研究代表者

四本 幸夫 (Yotsumoto, Yukio)

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・教授

研究者番号：50449534

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,400,000円

研究成果の概要(和文)：この研究は、国連食糧農業機関から世界農業遺産の認定を受けた日本の8地域がその遺産を観光に用いて農村振興を行う際の課題について明らかにしようとした。二次交通の問題と世界農業遺産の知名度の低さが課題として挙げられた。世界農業遺産とユネスコの世界遺産の比較をすると、世界遺産は城や寺など、その価値がすぐに分かるが世界農業遺産はシステムなので価値が見えにくいという問題がある。地域に役立つ観光振興には、学習と体験を組み入れた観光が適している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

世界農業遺産は新しい認定制度で、世界遺産が1,000以上あるのに対して、2021年の時点で、まだ62か所しかない。また、中国の1か所以外で、認定が進んだのは2011年以降であり、この認定制度を使った地域振興に関する研究はほとんどなされてこなかった。従って、この研究はその分野の知識を増やすという学術的意義がある。社会的意義としては、人口減少と高齢化が進む日本の農村での、世界農業遺産を観光魅力とした観光振興で地域活性化を目指すコミュニティに何らかの参考になることが考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study aimed at clarifying the challenges faced by eight areas of Japan that have been designated as Globally Important Agricultural Heritage Systems (GIAHS) by the Food and Agriculture Organization of the United Nations when they use the heritage for tourism in rural development. The problems of secondary transportation and the low profile of GIAHS were identified as issues. Comparing UNESCO's World Heritage sites with GIAHS, it was found that the value of the World Heritage sites such as castles and temples can be easily understood, but the value of GIAHS is difficult to see because it is a system. Tourism that incorporates learning and experience is suitable for community development using GIAHS as a tourism resource.

研究分野：社会学

キーワード：世界農業遺産 世界遺産 観光 農村振興 システム 体験観光 地域

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

世界農業遺産は、正式には世界重要農業遺産システム (Globally Important Agricultural Heritage Systems - GIAHS) という名称で、2002 年に国連食糧農業機関 (FAO) が創設した認証制度である。世界農業遺産は「社会や環境に適応しながら何世代にもわたり形づくられてきた農業上の土地利用、伝統的な農業とそれに関わって育まれた文化、ランドスケープ、生物多様性などが一体となった世界的に重要な農業システム」のことをいう。世界で 62 システム、その内、日本では 11 の農業システムが認定されている。さらに、日本の 3 システムが申請中で、日本は積極的に認定を目指している。日本の農業は、近年、耕地面積の減少、農業産出額の減少、農業就業人口の減少と高齢化を経験しており、認定を通して上記のような世界的に重要な農業システムを守っていくことは日本の農業にとって必要な施策となっている。日本政府と自治体が世界農業遺産の認定を目指すことには、農業の維持と活性化だけでなく、この認定を通して、観光を推進して地域の活性化を目指そうという意図もある。世界農業遺産に認定された地域または認定を目指している地域は農山村であり、農業の衰退だけでなく、人口減少と少子高齢化で地域の衰退が懸念されている。このような地域を活性化する手段として観光に注目が集まっている訳だが、ユネスコの世界遺産では、認定後にはその地域の知名度が上がり、観光客が増加するので、世界遺産の認定は地域ブランドの形成や向上につながっている。国と自治体は世界遺産と同様に世界農業遺産の認定も地域ブランドの形成と向上に寄与し、観光客の増加につながり、ひいては地域の活性化につながると考えている。

2. 研究の目的

日本の世界農業遺産認定地域で、認定を契機に、国内・国際観光を通じた農村振興がどのように進められているかを比較研究し、その課題やベストプラクティスを見出し、そこから農村振興に役立つヒントを見出すことが本研究の目的である。具体的には、観光を用いた農村振興に関して (1) 8つの地域共通の課題とそれぞれの地域特有の課題を明らかにする、(2) ベストプラクティスを見出し、その要件を明らかにし、地域に役立つモデルを提示する、(3) ユネスコ世界遺産との相違を明らかにする、というものであった。なお、8つの地域は本研究課題申請時の日本の世界農業遺産の数である。

3. 研究の方法

アンケート調査は日本の世界農業遺産 9 地域 (平成 29 年月登録の宮城県大崎地域を含む) に属する 53 の地方自治体に対しておこなった。53 の自治体のうち、31 か所から回答があった。現地調査は、新潟県佐渡市、石川県能登地域、静岡県掛川周辺地域、大分県国東半島宇佐地域、熊本県阿蘇地域、岐阜県長良川上中流域、宮崎県高千穂郷・椎葉山地域、静岡県わさび栽培地域の 8 認定地域でおこなった。具体的には、各自治体の世界農業遺産担当部署の職員へのヒアリング、及び、農家、農村民泊事業者、地域の住民などのステークホルダーにインタビュー

ーをおこなった。また、農村景観や観光アトラクションの観察もおこなった。文献調査は、世界農業遺産関連の文献を収集し、質的分析ソフト NVivo により内容分析をおこなった。

4 . 研究成果

8 地域共通の課題とそれぞれの地域特有の課題を明らかにする。

8 地域共通の課題として、二次交通の問題がある。世界農業遺産の 8 地域の中にある自治体は、そのほとんどが過疎地域であり、都市部が世界農業遺産のエリアになっているのは岐阜市ぐらいである。空港や鉄道駅から世界農業遺産の観光スポットまで行くのに、1 日に 2~3 本でも路線バスがあればいい方で、路線バスが走っていない地域の方が多いと言える。従って、個人で世界農業遺産を巡るにはレンタカーが必要になる。交通の便が非常に悪く、目的地に着くまでに時間も費用も多くかかる。この交通の便が悪いことは、逆に言えば個人旅行においてはできるだけ長く滞在するような観光が向いているという事である。滞在期間が長くなるという事で、宿泊や飲食で地域にお金が落ちる。個人旅行の場合には、交通の不便さを逆手に取るようなことが必要となる。

もう 1 つの共通の課題は、世界農業遺産の知名度の低さである。ユネスコの世界遺産は多くの人知っているが、世界農業遺産は一般の人はほとんど知らないと言ってもいいくらいである。この知名度を上げるために、世界農業遺産とは何かという説明が必要になってくる。不動産として目に見える世界遺産とは異なり、世界農業遺産はシステムなので、基本的には目に見えない部分が多く、目に見える景観、農産物、農業実践などについても、それらがシステムとどのように関連しているのかという部分は簡単に説明するのが難しい。知名度を上げる為には、システムをわかりやすく説明できる仕組みが必要である。主に地域の子供たち向けであるが、最近行われているマンガを使った世界農業遺産の説明は大事な取り組みだと思われる。また、システムとしての遺産を目に見える形で示していくことが知名度を上げることに繋がる。各認定地域のシステムのシンボリックなものを紹介していくことも効果的である。

地域特有の課題に関しては、特徴的なものを 3 つ挙げたい。1 つ目は、一次産業で発展してきたので、観光による農村振興のイメージがわからないというものである。和歌山県みなべ・田辺地域の世界農業遺産は梅の生産システムで、農業から十分な収入を得ており、観光につなげる必要性があまり感じられない。従って、世界農業遺産を観光に絡めて地域振興をする場合は、人々の意識の変化が求められる。2 つ目は、土産として販売できる商品のバリエーションが少ないというものである。静岡県掛川周辺地域の世界農業遺産は、「静岡の茶草場農法」であり、茶に特化した農業システムなので、世界農業遺産の商品とした場合、茶と茶を使った加工品に限られる。また、静岡県わさび栽培地域の世界農業遺産は、「静岡水わさびの伝統栽培」であり、わさびに特化した農業システムなので、わさびとわさびを用いた加工品に限定される。従って、静岡の 2 つの世界農業遺産は、加工品に工夫を加えて土産のバリエーションを多くしていく必要がある。3 つ目は、他の世界的な認定を受けていて、世界農業遺産なしでも集客できるというものである。阿蘇地域は 2013 年に世界農業遺産の認定を受けた。そして、翌年の 2014 年にユネスコ世界ジオパークへの加盟認定を受けている。現在では、阿蘇の PR には、後者の認定制度を活用する機会が多くなっている。自治体では異なる認定に対する施策を別々の部署がおこなっている場合が多いので、認定制度を使った地域ブランディングを 1 つの部署が担当する必要がある。

ベストプラクティスを見出し、その要件を明らかにし、地域に役立つモデルを提示する。

世界農業遺産の認定が観光振興につながっているかどうかについては、地域にばらつきがあるように見える。静岡県茶草場農法世界農業遺産では、世界農業遺産を観光振興に活発に利用しており、宿泊統計の推移を加えて分析すると、この地域では世界農業遺産は観光集客に一定の寄与をしていると見ることができる。また、阿蘇の世界農業遺産でも同様に観光統計の分析から直接的ではないが、認定が観光客の増加に一定の寄与をしていることがわかる。一方で、現地調査でのインタビューや観察をもとにして、佐渡の世界農業遺産を見てみると、佐渡全体での観光客数は減っていて、世界農業遺産を活用した取り組みも岩首棚田の1人1,800円のツアーのみで、自治体は世界農業遺産の観光への活用にそれほど熱心ではない。各地の世界農業遺産地域を見ると、多くの場合、世界農業遺産の認知度を上げる目的でのモニターツアーがほとんどで、商品化までには至っていない。また、認定地域の中の自治体には世界農業遺産に対する認識やその活用などに温度差があり、例えば静岡県の水わさびの伝統栽培世界農業遺産地域では、7つの自治体の中で伊豆市のみが観光への活用を積極的におこなっている。

このような世界農業遺産の観光振興への活用状況の中で、世界農業遺産を上手く利用して観光集客に成功している事例が2つある。1つは岐阜県の「清流長良川あゆパーク」で、もう1つが能登半島の「春蘭の里」である。「清流長良川あゆパーク」は、2018年6月にオープンした県の施設で、長良川流域のことを学び、鮎釣りや鮎を食べるという体験ができる施設である。手ごろに体験できる場所として、学校の遠足等の行事、家族旅行、団体旅行での行先となっている。オープンから1年2ヶ月で30万人が来場した。「春蘭の里」は、小学校が閉校してしまった高齢化した過疎地域であるが、43世帯が農村民泊に参加していて、年間1万人以上の個人客、修学旅行生、外国人観光客が泊まりにやってくる。

2つに共通する成功要件としては、これらの取り組みや構想が世界農業遺産の認定以前からあったという事である。あゆパークでは世界農業遺産の認定により、何十年も構想はあったが実現できなかった事業がようやく実現できた。春蘭の里の農泊は以前から行われてきたが世界農業遺産の認定により、その地域のブランド力が向上して更なる集客（主に海外からの観光客）に役立ち、地域の人も誇りをもって自分たちの地域を観光客に見てもらえるようになったことである。他の成功要件としては、学習と体験を重視することである。あゆパークでの長良川流域の漁業などの学習と鮎釣りや鮎の塩焼きを食べる体験が都会の日常では味わえない体験としてある。春蘭の里では、都会にはない田舎の家屋での宿泊、田舎の食材を使った食事、農業体験や炭焼き体験など、昔からある人々の生活の知恵を学び、生業を体験することができる。

他の要因としては、事業主にそれを推進する責任感があることである。あゆパークは県の事業であるが、県の里川振興課が世界農業遺産関連事業として色々な事に手を出すことなく、あゆパークに焦点を当てて積極的に事業を展開している。春蘭の里は、春蘭の里実行委員会事務局長のT氏が地域再生の切り札として、その立ち上げから拡大までを一身に担ってきた。このように、組織として、また個人として責任をもって事業を推進していることがその成功要因である。

以上から言えることは、地域に役立つ観光振興のモデルは、学習と体験を組み入れた観光ということである。世界遺産とは異なり、世界農業遺産は農業システムなので抽象的な部分があり、学習と体験のプロセスを経ないとその良さがなかなか理解できない。従って、それらを取

り入れることが必須となる。世界農業遺産システムは複雑なので、学習と体験は一過性のものではなく、何度も訪れるほどその良さがわかってくるようなものであると考えられる。従って、リピーターを視野に入れるプログラムを考えることが重要になってくる。世界農業遺産を用いた観光振興の方向性はこのようなものであるが、観光振興を地域振興に繋げるにはその間に大きなギャップが存在する。地域振興の最終的な目標は、人口減少と高齢化を抑えて、人口増加に転換させて活気のある地域を創っていくことだと考えるが、観光振興が成功しても高齢化を抑えて人口増加に転じる地域はなかなか現れてこない。交流人口が増えて地域に活気もたらされるところまでは実現するが、多くの若者が定住するまでには至らない。成功モデルである春蘭の里でも農泊実践者の高齢化が進み、後継者を育てていくことの模索が続けられている。

ユネスコ世界遺産との相違を明らかにする。

世界遺産は自然遺産と文化遺産、そしてそれらが合わさった複合遺産に分けることができるが、ここでは文化遺産との比較とする。世界文化遺産とは、歴史、芸術、学術的な観点から顕著な普遍的価値（Outstanding Universal Value）を持っている遺跡、建築物群、モニュメントのことである。これらに、1992年12月の第16回世界遺産委員会で文化的景観が追加された。文化的景観には3つのカテゴリーがある。1つ目は、庭園、公園など人間により意図的に造られた景観である。2つ目は、棚田など農林水産業と関連した有機的に進化する景観である。3つ目は、信仰の山など自然と宗教、芸術、文化が重なった景観である。このように世界文化遺産は遺跡、建造物群、モニュメント、文化的景観であり、いずれも目に見える物件がその対象となっている。

世界農業遺産は英語では Globally Important Agricultural Heritage Systems であり、そのまま訳すと「世界的に重要な農業遺産システム」となる。世界農業遺産とはシステムを対象としたものであり、システムの特徴は抽象的であるという事だ。世界農業遺産の認定地域を見ると、持続可能性や生物多様性などの抽象的な概念が使われている。また、水の確保、草原管理、焼畑管理において循環的思考が重要視されている。従って、世界農業遺産をよく理解するためには、これらの概念の理解が必要となってくる。また、世界農業遺産ではシステムが大事なので、世界文化遺産のように見ただけで素晴らしいと思うような遺跡や建物などは存在しない。例えば、静岡の茶畑の畝にある干し草を見ても、そのシステムの理解がないと素晴らしいと思えない。一方で、歴史のことをよく知らなくても世界遺産の金閣寺や姫路城を見ると素晴らしいと思うだろう。

このような違いを考慮に入れることは、認定を契機に観光振興するにあたってどのような観光形態を用いたらいいかを考える上で重要になってくる。世界遺産の場合だと、団体旅行から個人旅行まで多様な旅行形態が可能である。団体旅行として世界遺産を巡るバスツアーや、歴史を深く学びながらじっくりと世界遺産を見る個人旅行などが可能である。世界農業遺産の場合、世界遺産のように見ただけで素晴らしいと思うようなシンボリックな景観や建物等がないため、バスで見て回るようなツアーはあまり魅力的ではないだろう。体験旅行や教育旅行のように農業体験や農業システムの学習をしていくようなものが向いていると思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 四本幸夫	4. 巻 29
2. 論文標題 日本の世界農業遺産研究の動向	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 農耕の技術と文化	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Yotsumoto Yukio, Vafadari Kazem	4. 巻 16
2. 論文標題 Comparing cultural world heritage sites and globally important agricultural heritage systems and their potential for tourism	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Heritage Tourism	6. 最初と最後の頁 43～61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/1743873X.2020.1758116	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久保隆行	4. 巻 53
2. 論文標題 日本の地方中枢都市・福岡のグローバルポジション：世界の地方中枢都市との4年間の比較検証をもとに	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本都市学会年報	6. 最初と最後の頁 221-229
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 12件）

1. 発表者名 四本幸夫、カゼム・ヴァファダリ
2. 発表標題 日本の世界農業遺産地域の自治体の観光を通じた農村振興：アンケート結果
3. 学会等名 第6回東アジア農業遺産学会（韓国慶尚南道河東郡）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 久保隆行
2. 発表標題 日本の地方中枢都市・福岡の国際競争力：世界の地方中枢都市との4年間の比較検証をもとに
3. 学会等名 日本都市学会第66回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 四本幸夫
2. 発表標題 日本における世界農業遺産の研究の現状について
3. 学会等名 The 18th Asia Pacific Conference, Ritsumeikan Asia Pacific University, Beppu, Japan (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yukio Yotsumoto
2. 発表標題 Branding communities by international certification: Efforts to aim for a World Heritage Site and Efforts Using Globally Important Agricultural Heritage Systems in Sado Island, Niigata Prefecture, Japan
3. 学会等名 Tourism Webinar, Volume 12, Branding small communities using international certifications (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Takayuki Kubo
2. 発表標題 Branding small communities using international certifications: Cases in Shizuoka Prefecture, Japan
3. 学会等名 Tourism Webinar, Volume 12, Branding small communities using international certifications (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kazem Vafadari
2. 発表標題 Branding GIAHS or GIAHS branding, lessons from Oita agriculture heritage community
3. 学会等名 Tourism Webinar, Volume 12, Branding small communities using international certifications (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 四本幸夫 カゼム・ヴァファダリ、久保隆行
2. 発表標題 Stories to sell products in tourism destinations of globally important agricultural heritage systems
3. 学会等名 The 17th Asia Pacific Conference (Ritsumeikan Asia Pacific University, Beppu, Japan) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Vafadari, Kazem and Yukio Yotsumoto
2. 発表標題 Regional examples of community development & revitalization efforts through tourism
3. 学会等名 UNWTO, JICA and APU, Future Tourism Leaders Workshop “Community development and revitalization through tourism” (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Vafadari, Kazem and Yukio Yotsumoto
2. 発表標題 Tourism and Revival of Agriculture Heritage : Landscapes: The Case of Kunisaki Peninsula in Oita Prefecture, Japan
3. 学会等名 The 16th Asia Pacific Conference (Ritsumeikan Asia Pacific University, Beppu, Japan) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Vafadari, Kazem
2. 発表標題 Challenges and Opportunities of Agricultural Heritage Conservation in Belt and Road zones: an Iranian Perspective
3. 学会等名 Hangseng university Hong kong the workshop on "Diplomacy of Heritage Conservation and Tourism along Belt and Road Zones (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Vafadari, Kazem
2. 発表標題 Human Dimensions of Agricultural Heritage Landscapes: case of Community development in Ryovai Village Oita
3. 学会等名 The 5th Conference of ERAHS, August 26-29, Wakayama, Japan (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yukio Yotsumoto, Kazem Vafadari
2. 発表標題 A Comparison of Globally Important Agricultural Heritage System and World Heritage and its Implications for rural development through tourism
3. 学会等名 The 15th Asia Pacific Conference (Ritsumeikan Asia Pacific University, Beppu, Japan) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kazem Vafadari
2. 発表標題 Tourism and community building in satoyama landscapes of Japan
3. 学会等名 The 15th Asia Pacific Conference (Ritsumeikan Asia Pacific University, Beppu, Japan) (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Vafadari, Kazem and Malcolm J. M. Cooper (Bahram Nekouie-Sadry, ed.)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Apple Academic Press Inc. USA	5. 総ページ数 17 (587)
3. 書名 Community Engagement in Japanese Geoparks in The Geo-Tourism Industry in the 21st Century	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	V A F A D A R I K a z e m (Vafadari Kazem) (70628049)	立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・教授 (37503)	
研究分担者	久保 隆行 (Kubo Takayuki) (70730357)	立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・教授 (37503)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------